

かつてのイノベーターたちに学べ

本誌がまだ隔月刊だったころの36号の「農業経営者ルポ」を読み返した。「自分の目の中に灯台と顕微鏡を持つ」と題して紹介したのは、北海道栗山町の勝部征矢氏と先代の徳太郎氏である。

勝部農場の現当主は徳太郎氏の孫である佳文氏が引き継いでおり、現在の経営規模は200haに達する。全面積に小麦が栽培され、50年以上も連作されている。しかも、大規模経営でありながら、空知エリア内で突出した平均収量レベルを維持している。

ここで注目すべきは、徳太郎氏、征矢氏、そして佳文氏の三代にわたる稀有な農業イノベーターとしての存在である。

江刺の稲

「江刺の稲」とは、用排水路に手刺しされ、そのまま育った稲。まったく管理されていないこの稲が、手をかけて育てた畦の内側の稲より立派な成長を見せている。「江刺の稲」の存在は、我々に何を教えるのか。土と自然の不思議から農業と経営の可能性を考えたい。

徳太郎氏の時代の経営面積は、当時の多くの北海道農家と同じ2・5haだった。終戦直後、日本が食糧難にあえいでいたさなかに大規模にイチゴを作り、大きく当てた。しかし、23年、24年ごろには儲かっているイチゴをやめてしまう。「兵隊が復員してくれば勝部農場を真似してイチゴ作りを始める者が出てくるだろ

う」という理由だ。

次に始めたのはダリアの生産だった。人々は暮らしが安定するにつれて庭に目をやる余裕が出てくる。それまで芋を植えていた庭に花を植えるようになると考えた。しかも、ダリアなら切り花で集荷して球根も売れる。一つの作物で二度の商売ができる。その後も勝部農場は様々な作物で成功する。

征矢氏が就農してすぐの昭和32年に日本に初めて輸入された5台のフォード32馬力を征矢氏は徳太郎氏を説得して導入。勝部農場が12・5haに麦、小豆、大豆や種採り用のサヤエンドウなどを作っている時代だった。当時の農業関係者たちはこぞって個人でトラクターを導入することを経営的に見合わないと評していたが、征矢氏は寝る間を惜しんで賃耕して回った。誰も持っていないトラクター。トラクターなら馬耕より深耕が可能で、増産の時代に誰もが征矢氏に賃耕を頼んだ。そして翌年、52馬力のフォードを導入し、麦のドリルも買った。さらに、アメリカからカタログを取り寄せ、それを参考に鍛冶屋に泊まり込み、畝切

り、施肥、土壌混和、溝切り、播種、覆土、鎮圧の7工程を時速4kmで処理する5条のコーンプランターを作った。その仕事量は7工程で5条だから、それだけで35人分。作業速度を考えれば70人以上の仕事をする。この体験が征矢氏を麦の単作経営へと導いた。あれほど高収益の作物を作ってきた勝部農場は反収を高めることより投下労働時間当たりの収益こそが儲かることに気づいたからだ。

今のような補助金や交付金などない。それでも、否それであればこそ勝部農場のイノベーションがあったのだ。

現在、各地の若い農業経営者たちによるすばらしい取り組みがあることを知っている。そんな経営者たちこそ勝部農場の来し方を見習ってほしい。

その道を指し示す指導者などいない。むしろ、訳知り顔の識者たちの陰口を聞き流しながら、時代の変化とマーケット、そして人々の暮らしを見つめながら誰も考えない未来を切り拓く。それが本物のイノベーターなのだ。やがて今のような水田に対する交付金など期待できなくなる。行け！経営者たちよ。